

薩藩武芸文化探検

——文亀から元禄にかけて——^①

ペルザー・ロブ

始めに

本稿は研究生活を開始しようとしている未熟な者の単なる自己紹介であり、東京大学史料編纂所、取り分け山本博文教授、に大変お世話になっている者の志の象徴でもある。本稿の内容は著者の博士論文主題への道程と現在行っている博士論文研究の一部として、日本語文献と史料の探求により短期間にわたって絞り出された知識や感覚に過ぎず、結論まで達成していない段階の印象論である。

最初に、本稿の根本的な内容を前以って紹介する事にしよう。内容は大まかに六つの項目に分かれている。一つ目は現在に到るまでの研究道程や今回の博士論文主題の根本的発想を説明しようとする序言である。二つ目は「武芸文化」と言う概念を私自身の個人的な解釈を通して把握しようとする項目である。三つ目は本研究に不可欠と思われる鉄砲伝来による技術的及び戦略的な展開を語る項目である。四つ目は薩摩を現在まで代表して来た武芸流派を大まかに紹介する事を目標にした項目である。五つ目は本研究の中、前項目と表裏をなすと言う存在意識で取り上げる薩住刀鍛冶の代表的な二系を紹介したい項目である。六つ目はこの

オランダ人から見る古文書学上の諸問題を取り上げる事によって、本研究の困難さを説明したい項目である。そして最後に、「(終わりに)奥細道」を題目にした項目は、本研究の学問的意義を様々な側面から探求する事によって、包括的に把握しようとする項目である。

この六つの項目の中、様々な概念は未だにしっかりと把握していない為、課題が多少重複する可能性があるので、前以ってご了承されたい。

(一) なぜ薩藩武芸文化を研究主題に？

博士論文主題に到るまで少し速回りさせて頂いても宜しければ、先ずその序言を述べたいと思う。私はオランダのライデン大学文学部日本学科の学生時代以前から、日本の武道文化に強い関心を持っていた。当然、修士論文に挑んだ時は武道に関する主題を選択した。それは「日本武道の稽古に励む人間の人格心理学のおよび社会心理学的な特徴の一考察」と言う主題であった。修士論文の一番大きな内容の問題は、心理学の知識不足と言う事であったが、その為にライデン大学心理学部で、重要に思う人格心理学や社会心理学や神経心理学の授業を履修してそれぞれの学術書を勉強する必要があった。こうして得られた大事な基礎知識によつ

て、武道精神の心理学的な側面もある程度分析が出来た。だが、主題を幅広く捉えようとしたので、当時の私には奥深い有意義な結論がなかなか掴めなかった。

現在の私でも武道精神はまだまだ理解不足のままであるが、挑戦している博士論文の主題は変更したもので、武道精神には殆ど触れなくてもいい状態にあると一時的に思った。しかし、武道文化の一面は精神面ではないかという批判をうけない内に、やはり現在の主題でも精神問題に付いて検討しなければいけない事はここで前述して置きたい。私の使命であろうがなかるうが、しつこい武道精神から逃げられなさそうな気もする。その本主題との関わりは後ほどもう少し詳細的な考察を加える事にする。

本来の私は、日本武道の実技に興味を抱いているだけでなく、東アジアの諸国に於ける武芸が同様な史的発展を見せている事が指摘できるが、実技の根柢となった思想にも興味がある。しかも、全般的には出来る限り幅広く把握しないと一方的表面的な解決に過ぎないと思われる上、Paul Feyerabend⁽²⁾等の西洋の哲学者が指摘する分析の危険性を頭に入れて置きながら、多側面から問題に光を照らして、必要性に従って集中した解釈まで絞ると言う捉え方は妥当である。修士論文もそうであったし、今回の博士論文もそう言う風に取り組んで行きたいと思う。

さて、遠回りしながら博士論文主題にやつと辿り着いたので、その諸問題に付いて述べてみよう。主題そのものは「十六・十七世紀の薩摩藩に於ける武芸文化」と言う事で、このままでは不透明と抽象的に思われる読者がいらつしやるであろう。もう少し詳細に述べてみると、当時の薩摩藩の武芸文化と関連して実践的、あるいは教養的な影響力を有した社会文化的組織の特徴とその武芸文化との関係を、第一次史料の検索より絞り出した上で、第二次と第三次史料とも利用しながら、特に当藩の

刀剣鍛冶屋や盛んだった剣術流派、要するに役職上の刀剣関係者から明らかにしたい。この主題は修士論文と同様に幅広いと思われるし、私自身は改めて大きな研究上の問題に突き当たってしまった。それは古文書解読と言う簡単に見えるけれど、実際に漢文の基礎知識さえ今まで持っていない⁽³⁾、崩し字で書かれた古文書のお陰で精神的混乱に落ち込みそうになった、私の様な者にとつて非常に困難となり得る問題である。史料編纂所にやって来てから五ヶ月しか経っていないこの段階では、当然その課題を達成していないままである。もう一つの研究上に発生した問題は、刀剣鍛冶屋の第一次史料が多くは残っていない⁽⁴⁾と言う事実である。当時、刀剣の事が「関物」と呼ばれる程、全国的な中心地となっていた美濃国関の有名な刀鍛冶七流であれば史料が結構残っている⁽⁵⁾、周辺部にある島津家領地の薩隅日の三ヶ国から見れば、刀鍛冶は領地内で所々広げ伸ばして少なくとも十系が存在していたと検証ができて、その史料が殆ど残っていないのが実情である。

この二つの研究問題を考察した上で、いったい何故この研究主題に挑戦するかと言う風に疑問をもたれる読者がいらつしやるかも知れない。一つ、日本武道は当時期に組織化しつつあったので、近代日本に於ける武道の存在意義を理解する為には武道の起源を始点に探検するべきである。そして、本研究の先学がない為、(遥かあなたの史的日本にあった文化的特徴ではなく現在の)日本文化の不可欠な側面が西洋の日本学界に軽視されている事実は大間違いだと私は思う⁽⁶⁾。特に、日本のおよそ八百年にも及んだ武家政権⁽⁷⁾が、現在社会にも無意識的であろうが意識的であろうが大幅な影響を及ぼしつつあることは、幾ら否定されても、現在の日本社会の何処を見ても明確であろう⁽⁸⁾。武道と関係なく厳守される礼儀作法や重んじられる面目に外ならないと言われる方は、重要な事を取り上げると私が認めているけど、こう言う時に西洋でよく使用されて

いる格言で「鶏と卵、どっちが最初だった？」とは問題の本質を表すのではなからうか。いずれにしても、武道が全く関係ないとは主張する事が出来ないだろう。

話は少し逸れてしまいが、ここでは上述の「日本文化の不可欠な側面が西洋の日本学学界に軽視されている事実」と言う著者の判断に付いて考察を書き加えてみよう。「武道の社会的な意義」と言う問題点を取り扱う研究が西洋の大学で行われつつあっても、片手で数えられる人数の個人的な努力に基づいているに過ぎない。その中の有意義な問題点としては次のことが考えられる。武道の現代的な存在意義は如何に把握すれば良いのであろうか。そして、武道は日本の歴史の中に如何なる社会文化的な役割を果たして来たのか。それとも、武道は日本人の心理に如何なる影響を及ぼして来たのか。こう言う風な問題点が西洋の日本学学界の中に生きているかに付いては、現在、西洋の代表的な大学と思われる日本学の課程の実態と附属図書館所蔵の武道関連文献の割合による演繹した普及率から明らかにしたい。代表的な大学としては、ヨーロッパのライデン大学とピエナ大学とロンドン大学、更に米国のハワイ大学とハーバード大学とコロンビア大学と合わせて六校のそれぞれの日本学教育を行う学科や研究所を選択した。⁹⁾ところが、課程の項目や関連文献を見るだけではその内容が明確になると言えないので、この分析は必ずしも間違いがない訳ではないが、ご参考になる為には役立つまいかと思う。

さて、ヨーロッパの代表的な大学の考察に入ろう。学部課程は三校とも日本文学を媒体に日本語能力に焦点を置くが、教員の専攻によって歴史や思想史や宗教や経済や政治や芸術や法学や人類学のそれぞれの専門分野を縄文時代から現代まで学生に入門的に紹介する課程である。要するに、かなり幅広い課程であるので、奥深い課程を提供する余裕がなさ

そうだ。大学院になると三校ともほぼ同じ様な課程を提供しているが、学部課程の主題よりも相対的に奥深くなって来るし、教員の専攻を考慮に入れて貰いながら、大学院生は関心に応じた卒業論文主題を自由に選択する事が出来る課程である。その中には武道文化に付いての論文主題も見当たりますが、三校とも武道の専門家（武道経験者であり、武道に関する研究を施行）がいない為、卒業論文の一部しか占めない。それぞれの附属図書館の所蔵文献で見ると、日本関連文献と武道に関連する種目を比較的に見れば、ライデン大学は八、〇三九種目から七、ピエナ大学は四、七九五種目から四二、そしてロンドン大学は二六、〇七八種目から一〇種目と言う実情である。つまり、一番多い所は日本関連文献の中に武道関連文献の割合が％未満である。

続いて、米国の三校は学部課程がヨーロッパと同様に日本文学を媒体とした日本語能力に焦点を置いて、他にもそれぞれの専門分野を表面的に紹介する課程である。大学院になると、選択できる分野の幅はヨーロッパの大学より相対的に広くなりそうであるが、武道に直接関連を持つ研究は非常に少ない。それから、それぞれの附属図書館の所蔵文献で見ると、次の通りである。ハワイ大学は日本と関係する一〇、〇〇〇種目から四三が武道と関連し、ハーバード大学は一二七、八八八種目から一八、コロンビア大学は一〇、〇〇〇種目から四〇という、ヨーロッパの大学よりも全般的に情けない実情である。武道を取り上げる授業は米国の代表的な大学で全く見当たらないが、注(6)に取り上げた文献の著者の二人は明解に武道をそれぞれの授業で取り扱う実例がある。¹⁰⁾しかも、その僅かの武道専門家が勤務している大学でも、附属図書館の日本関連文献から武道関連文献を検索して見れば違う結果が出るはずなのに、その冊数は上述された代表的な大学と殆ど変わらない状況である。従って、上記の問題点は西洋の日本学学界で殆ど関心を持っていない為であるの

で、日本の伝統文化と見なすべき武道が軽視されていると言う解釈は不当ではない事が演繹される。

さて、元の筋に戻れば、一つ、武道の起源と言えば難航するかも知れないけど、戦国時代を挟んで中・近世の研究を考察した結果、戦国動乱から徳川家の支配による平和に到るまで、総合武術の武道への変換は、非常に不透明で小規模な社会的特徴と個人的能力次第でありながら、最も古い総合武術の流派と思われる十四世紀前半に開祖された中条流から十七世紀前半の武道組織完成までは、少なくとも三世紀に渡ったのである⁽¹²⁾。武道組織完成と言う言葉はどう言う風に理解すればいいかという問題に付いて、思想的な面だけでも考察を書き加えたい。

この話は「攻撃性」と言う感情的な概念が重点となる。この概念は次の通りに把握すれば良からう。先ず、「攻撃性」は怒りと言う感情に基づく行動であり、概念そのものは感情ではない。しかしながら、怒りと言う感情と密接に結び付いているので、感情的な概念で知られている。

この概念は大まかに言語無使用と言語使用と体罰による「攻撃性」と言う風に三つの種類に分けられ、人を無視する事から殺人まで様々な段階で分別の出来る表現の仕方がある。要するに、言葉で「攻撃性」を表現する事や身体的な行動で表現する事等が出来、態度だけでも「攻撃性」を表現する事が可能である。さて、周知の通り、徳川平和の中に十七世紀の最後の大合戦は鳥原の乱であった。それまで武士にあった道は、藩士か浪人か僧か、その三つに大まかに分別が出来よう。そして、前世紀の兵農分離で正式に武士階級に固定されてしまっても、大小を捨てて商人か百姓かに生まれ変わった浪人も少なくなかったのである。その中、定着した或いは確かな生活目標のある藩士と僧は問題が発生しなさそうであったが、収入のない貧しい生活をしていた浪人は未だに多く残っていたので、いつ反乱が起きるかは分からない社会的な状況であった。道

場を開く事か武術指南役を勤める事かで貧窮から救出される為に、腕を磨く事を目標として武者修行に旅立った浪人が何人いたかは調べる手段のなさそうな問題だけれども、有名なのは宮本武蔵である⁽¹³⁾。彼の様に武術の奥義を解く伝書を残した事は結局、総合武術の武道への変換を完成させた。その史的「瞬間」は、江戸柳生新陰流の流祖として徳川家剣術指南役を勤めた柳生但馬守宗矩が寛永九年に完成させた著作「兵法家伝書」にあった。その中、「活人剣」と言う概念は武道の本質を齎してくれた。即ち、武術の「殺人刀」を武道の「活人剣」に変換したと言う事は、感情的な概念に言い換えれば、「攻撃性」を上手く利用して破壊的な精神力を建設的な精神力に変換し、包括的に活動させる事を剣法目的にした⁽¹⁴⁾。つまり、江戸幕府は柳生宗矩の剣術、特にその伝書(所謂、武道的思想)を媒体として、当時の社会的問題であった浪人の存在をきつかけに、武者者の根本的な思想を変更させようと言う小規模な方針に於いて社会の治安を図ったのではなからうか。要するに、総合武術の武道への変換は武士の存在意義を考え直すべきでなく、武道そのもの或いはその思想はもっと大きな社会的な意義があるから発生したと言う風に把握すれば妥当ではあるまいかと思う。と言う事で、私の武道組織完成に付いての思想的持論を総括する事がある程度できたと思うが、この持論は未だに証明する事が出来ず、只の感想であるので、読者のご批判を待ちたい。

本研究が対象とする時期に開始された武芸流派増加は、数の一番多かった時に六百くらいから七百四十五程度に及んだが、如何にも非常に多かったと言う事である⁽¹⁵⁾。この中、日本の何処の武芸文化を研究すれば有意義なのかは主に次の条件で決定した。先ず、一般の第一次史料の十分残っている領地である事。第二、代表する武芸は対象とする時期に発生した上に、現在に到るまで伝承されて来た流儀である事。第三、地元

でその流儀の本格的な研究が実行されている或いは実行された事。第四、私自身に興味の湧いて来た領域である事。

上記の条件は結果的に薩摩藩の武芸文化を齎した。それに興味を抱く様になった理由は六つが指摘できる。一つ目は薩摩藩の武家人口が約二割を占めたと言う事実であり、二つ目は薩摩藩の独特な外城制度で、三つ目は示現流剣術の流祖である島津家剣術指南役も務めた東郷重位の生涯である。四つ目は文禄年間中か慶長年間初頭¹⁶⁾かに島津家に招待された美濃国刀鍛冶の丸田備後守氏房の生涯と、序^{ついで}に鹿児島に定着した薩住刀鍛冶の丸田系の相対的に短い存在である。五つ目は本来島津家刀鍛冶を務め、現在まで千年以上に及んで伝承されて来た波平系刀鍛冶が当時どうしたのかと言う疑問である。六つ目は初代藩主家久の祖父貴久の父忠良が作成した「島津いろは歌」と二代藩主光久の「武道書」への関心である。(実は、もう一つ関心深い問題点は桜島の名前の由来であるが、博士論文では有意義な論点として取り上げる事が可能であるけれど、本稿では遠慮をさせて頂きたい)

(二) 武芸文化の解釈

「武芸文化」と言う概念はいつたいどう言う風に解釈すれば良いのであろうか。説明しようとして見るとそう簡単な事ではない。武芸は日本文化のみに独特な特徴ではない、そして、その文化的な解釈は人間の本質に関わる問題であるから、複雑な因子は様々であり微妙なところの多い研究主題としては見渡し難い。先ず、概念用語の選択に付いて簡単に解明したい。以前、私は日本人の先生方の何人かとの会話中で「武道文化」と言う単語を使用した¹⁷⁾が、苦手な発音で「武道」がよく「葡萄」と聞き取り間違えられた為「武芸」に改めた。更に、前述した通りに十六世紀の戦国日本に「道」の思想は武芸にまだ適応されていなかったため、

本主題の時期の前半に「武道」の使い方は不当であろう。そして、「道」の思想がいつ武芸に適応される様になってきたのか、はっきりと指摘出来ない。「武術」が「武道」へ進化したのは、戦国時代の動乱を生き抜いた武士達に新鮮な感覚を与えてくれた様に考えられる江戸幕府の築き上げつつあった戦のない社会の中で、武士としての存在意義を再発見する必要から生まれたと言う西洋学者がいるけれど、これは表面的な解釈に過ぎない。「武道発展」その問題自体はもつと奥深い解釈を必要とする。

ある意味では問題にできる限り幅広く接することが理想的であるけれど、その為には多くの史料が必要である。本主題の場合は、武芸を取り扱う信頼度の高い史料が少ないと言う事実から、他分野の適当な知識を利用するしかない。ここで言いたいのは、武家政権の戦国時代後半から江戸時代初頭に及ぶ十六・十七世紀の日本社会は、戦い自体の体験か戦いの記憶が残っているとと言うような精神状態にあり、当時の日本民族は軍事的政権の厳しさに慣れていた為、日常生活がその事実に対応したと考えるてもよからう。尚更、軍事的政権の媒体は武芸であると言えるなら、因みに、当時の日常生活そのものは武芸文化に占領された様に把握すればそう可笑しくはないだろう。こう言つた想像上の実情を解明する調査は何処から開始すれば良いのであろうか。武道の源流は原点として相応しく思う。

現代武道の源流は五つあるとされている。上記の十四世紀開祖の中条流はその一つであり、影(陰)流と念流と一刀流と新当流は残りの四つであると言う。武士は誰でも独特な流儀を開祖することができる訳ではなかった。前述した「武道」への道程は、武芸に腕が立つのは当然であるが、感情の面でかなり成長しており、相当な想像力も有する者でなければ無理であろう。言い換えれば、実存主義的な疑問と取り組んだ結果、

周辺に巡り会った神道や仏教や儒学の思想の受け入れによって悟った心境に基づく奥義が武道の特徴となった。要するに、文武両道の理想的な境地に達成する事が不可欠である。従って、武芸に腕が立つのは次の通りに捉えれば良からう。剣術は勿論の事、弓術や馬術や槍術や薙刀術等のあらゆる武芸に腕が立つと言う事であり、即ち、総合武術を修める事を意味する。実例を取り上げれば、薩摩の示現流開祖である東郷重位は上述の武芸を全部修めたと言われるし、流儀開祖する以前には、丸目藏人佐が開祖し薩摩藩にも盛んであった体(待)舍流の他流剣術にも励んだと言¹⁸⁾う。またそれ以外に、茶道や和歌等の文士の分野でもなかなかの腕であったと言¹⁹⁾う。

少々逸れてしまったが、本主題の不可欠に思われる問題は、上述した様に、戦いとその実際上に於ける精神状態の社会への感情的影響を把握する事である。この実際的な問題との取り組みは目撃記述と考古学の発掘物等の調査結果、即ち、(戦場)日記や軍記等の調査や考古学的な研究の解釈等によるしか解決する事ができない。現在の研究段階では考古学に手が届かないので、歯痒くても考慮に入れない。薩摩の場合は次の日記や軍記或いは武芸文化に関連のあると思われる文書が存在している。第一として念頭に浮かぶのは天正年間中に作成された『上井覚兼日記』である。それから、慶長年間に完成して明治二十年に謄写された『庄内軍記』が存在しているが、これは伊集院忠棟の暗殺をきっかけに、その子忠真が慶長四年に都城で島津氏に反乱した時の軍事行動を物語ったものである。しかし、これ以外の書物の存在についてははっきりと分らない為、さらに書庫調査を加える必要がある。関連すると思われる書物は『朝鮮日々記』で、島津軍勢参戦の慶長の役に医僧として従軍した真宗僧の伝播してくれた掛け替えない史料であり、近年活字化され刊行されたものである²⁰⁾。これ以外にも文禄と慶長の両役の目撃記述が存

在すると意識はしているが、私自身はその目撃記述をまだ見ていないので、その内容も本研究への有意義さも判断する事ができない。取り敢えず、史料名だけを取り上げよう。『大河内秀元朝鮮日記』や『大和田重清日記』や『面高連長坊高麗日記』や『朝鮮国往還日記』や『高麗日記』や『吉野日記』等がある²¹⁾。

それから、武芸文化を解明する手段は琵琶法師にあつて、言い換えれば琵琶歌である。薩摩武士が歌われる独特な薩摩琵琶は、物語の中で如何なる奥深い文化的な特徴を秘めているかを課題にすれば手掛かりが見付かることは言うまでもない。現在、私の意識している薩摩琵琶歌の研究は三冊しかないけれども、その内、これ以外にも何冊かが私の視野に流れ込んで来るのではないかと思う。意識している三冊は現代本で島津正氏の著作した『江戸以前薩摩琵琶歌』と『明治以前薩摩琵琶史』の二冊と、越山正三氏の著作『薩摩琵琶』と言う研究である。勿論、博士論文ではその内容を出来る限り詳細に明らかにするつもりだが、本稿は未だに不可能である。

もう一つ面白いのは刀剣贈呈の慣習である。日本全国で行われたので、薩摩独特ではないけれども、そして日本人の目で見れば武道と同様に当たり前な事かも知れないが、日本の場合はこの慣習より刀剣へどの様な鑑賞を演繹する事ができるであろうかと、西洋人の目で見れば関心深い論点である。そして、刀剣だけではなく馬や鎧や弓等の武器も贈呈し合ったと言²²⁾う。明確に、武器交流による関係を深める文化的設置が既に確立していた様に見えるが、更に史料検査による確認を必要とする課題である。

上記の問題点も何れは博士論文で取り上げて、様々な史料を引用しながら出来る限り詳細に把握したいと思う。

(三) 鉄砲伝来の戦術的意義

天文十二年八月二十五日に種子島銃がポルトガル人によって伝来した事は、戦国動乱の合戦にも影響を及ぼす様になって行く。この事実に従って戦争の実感も変わって来た訳で、戦略も次第に変換して行き、鉄砲が戦国時代の戦争に大きな役割を果たした。²³⁾種子島銃が実戦で初めて使用されたのは、天文十八年の黒川崎合戦での島津家派遣者の伊集院大和守忠朗と加治木城主肝付越前守・蒲生氏・渋谷氏の合同との対戦であった。²⁴⁾洞富雄氏の研究によると鉄砲の普及は、黒川崎合戦の当時、根来寺の傭兵集団や境の商人が伝来後早速の使者派遣によって僅かの期間内での製造法を修めて製造開始したと言う事で既に関西に辿り着いた。その後、近江国の国友村の刀鍛冶は鉄砲製造を開始して次第に名高い鉄砲鍛冶の中心地となった。²⁵⁾ここで刀鍛冶と鉄砲製造との密接な関係を表現した関心深いところが表れて来た。合理的に考えて見ると、金工技術的知識を有する刀鍛冶が鉄砲製造を任命された事は当然である。近江国の国友村でもそうであったし、種子島でも刀鍛冶が伝来直後に鉄砲製造と取り組む様に命じられた。従って、日本独特の冶金術の知識は刺激を受けて様々な転換を導入して行つたと考えられる上、尚更、より強い品質を齎す為に、刀剣製造用の原鉱は西洋の金属と取り混ぜられたかも知れない。如何にも、刀剣史の時代割りにはちよど豊臣政権の頃が古刀時代から新刀時代への転換時期となっているので、品質的には鉄砲伝来が関連しているのではないかと言う説がある。²⁶⁾

上記の説は確実でないかも知れないが、当時の刀鍛冶が刺激を受けたことは間違いないであろう。具体的にどう言う風な刺激であったかにはちよつと考察を加えて見る事にしよう。刺激を受けると言うのは全般的にどう言う事であろうか。個人は全く新しい知識が身に付いた事で視野

が広まって、自分がそれで興奮を感じる状態を刺激と言う。伝来直後、鉄砲製造の命を受けた種子島の刀鍛冶はその方法と取り組みながら様々な技術的な問題と遭遇したし、取り分け導火線の装置、ポルトガル人の鉄砲鍛冶をマカオから来日させるまでは、どんなに工夫しても製造の出来ない部分があったので、刀鍛冶が鉄砲伝来の出来事で受けた刺激も想像が付くであろう。鉄砲の漂着までの戦場上で一番有力性を持った武器は槍であつたらしいが、鉄砲は何メートルの距離を隔てながらも人を殺すことが出来たので、戦略は次第に変更すべき状況となった。だが、鉄砲の弱点は雨と、込め直すのに要する一分間程の時間の二点にあつたので、工夫が必要であつた。両者の工夫に初めて成功したのは織田信長である。前者は導火線の上に取り外し易い屋根の様な物を作つて鉄砲自体に付け加える事で解決されたのであるが、後者は鉄砲を込め直す時間を短縮する為に鉄砲隊を三列に分けて交代しながら発射させると言う、よく知られる長篠合戦の戦略で見事に解決する事が出来た。と言う事で、鉄砲伝来は技術的にも戦略的にも大きな役割を果たした事が明快となつた上、刀鍛冶がどんな刺激を受けたかが想像されると思ふ。

(四) 薩摩藩を代表する武芸流派

本論文で紹介したい剣術流派は薩摩独特の二つの「じげんりゅう」である。一つ目は上述の東郷重位が慶長九年に流祖した示現流である。二つ目は薬丸兼陳が江戸時代初頭に流祖した野太刀自頭流である。両者に付いて簡単な紹介と考察を書き加えたい。

前者の流祖、東郷越前守重位は天正十五年に京都の天寧寺の善吉和尚に天真自頭流を伝承され、鹿児島に帰国した後自ら鍛錬したと言う。そして、慶長九年、四十四歳の時に初代藩主家久の招きに従つて島津家師範役の待捨流の剣(村山氏の取り上げた文書は「待捨無二剣」が記述

されている)を利用した東小太郎と立合つて勝つたので、剣術指南役に命じられて、その後、示現流を開祖したと²⁸⁾言う。剣術指南役を任されて、知行は上級家臣階級程度の石高であったとする。⁽²⁹⁾ここで注目するべきは重位が家久に勝利のお祝いとして贈つた物である。それは氏房作(本研究の丸田系刀鍛冶)の刀であつて、村山氏の取り上げた文書は「長一尺六寸二部」までも詳細に記述してあると言う事で、剣術流派と刀鍛冶との密接な関係の初めての証拠と見なすべきではなからうか。なぜ、他の薩住刀鍛冶系の刀剣ではなく、氏房作刀剣が重位に贈呈されたかと言う疑問点是非常に関心深い。ちょうどその時には藩主の一番近くにあつた刀剣だつたからであらう、要するに偶然だつた、と言う答えは余りにも表面的であるので、あり得ない。

後者の流祖、葉丸兼陳は葉丸一族が本来大隈国人領主の肝付家の家臣であつて家伝の野太刀流を伝承したと³⁰⁾言う。現在、地元で野太刀自顕流は葉丸流とも呼ばれて、鹿児島に行つてその流儀の事を尋ねたら、示現流と同様に知らない人はいない。流祖の祖父、葉丸壱岐守兼成は島津家の家臣となつて文禄と慶長の両役、そして、庄内と関ヶ原の両合戦に従軍して剛勇を發揮した事でよく知られる人物であつたと言う。流祖の兼陳は家伝の野太刀流を修めてから東郷重位の門人となつて示現流に励んで、野太刀自顕流を開祖して「自顕」の二字を流儀名に入れた事で藩主に屋久島に流刑にされた³¹⁾と³²⁾言う。

示現流と野太刀自顕流の両者は現在まで一子相伝され、それぞれ十二代宗家東郷重徳氏と十四代宗家葉丸康夫氏まで伝承されて来た。⁽³²⁾示現流の本格的な研究は地元の村山輝志教授が実行されていて、示現流研究会まで開いて、現在まで四冊程度の書物が刊行されている。野太刀自顕流の研究は一件しか存在していないけれど、その一冊は鹿屋体育大学附属図書館に所蔵されている。⁽³³⁾要するに、本格的な研究が過去に行わ

れた事は明確であつても、一時的に中止となつた様である。しかも、著者が鹿体大在学中に出席した同大学の児玉正幸教授に実施された武道文化・倫理研究会の会議では、共に出席した葉丸流の代表者が自ら当流の本格的な研究を実行する予定であると言つた為、既にそう言つた望ましい研究が成功する可能性が高い。

示現流の上述した研究によつて明確となる根本的な思想構造は、儒学の朱子学と仏教の真言宗が主な影響を及ぼしたと言う事である。朱子学は善吉和尚の教えによつて導入されたと言うが、真言宗の教えは恐らく体(待)舍流が原点である。現在まで伝承されて来たその流派の特徴の一つは型を始める前に摩利支天経を唱える慣習である事からの演繹である。著者はその概念の解明は本稿の目標と頁数を考慮した上で相応しくないと判断した。只一つ、この場を借りて著者の実践的な経験により得られた印象を語つて見ると、非常に真剣な稽古の仕方、お礼は聖なる道場と祖先の神棚と稽古用の木刀にしかしない。稽古相手は敵と見なすべきなので、お礼は一切しない。要するに、道場は戦場であり、その実情に相応しく思われる心構えで稽古に励むべし、と言う根本的な教えであつた。立て木討ち稽古で、木刀を素早く振りながら氣勢を力強く出す事で心が冷静になると言う著者の経験に相応しく思われる心構えを指す。関心深く、氣勢の出し方は尋常な事ではないと理解させてくれたのが、稽古後の偶々出なくなる程に唄れた著者の声だつた。

(五) 薩摩藩の主な刀鍛冶

上記の剣術流派と同様に二つの刀鍛冶系を紹介したいと思う。それは波平系と丸田系の薩住刀鍛冶である。

前者の波平系は薩摩の最も古い刀鍛冶一派であり、永延頃に大和国から移住した正国と言う鍛冶が始まつた、現在まで伝承された系譜である。

刀製造法は、古刀時代（平安時代後半—豊臣政権）の山城伝と大和伝と備前伝と相州伝と美濃伝の五箇伝の内、大和伝系である。³⁴この刀鍛冶系は本研究が対象とする時期に衰弱した様であるが、その詳細は博士論文に解明したいと思う。

後者の丸田系は様々な理由に於いて関心深い。先ず、系譜歴を紹介して見よう。祖の丸田備後守（兵右衛門）氏房は美濃国関の兼房の子であって同族の氏房に鍛冶職を学ぶとされる。そして、天正十五年頃に島津家に招かれて鹿兒島に移住すると言う。残念ながら、その作品は殆ど残っていないとされるが、美濃伝で作刀した。その長男も当然ながら氏房と名付けるが、美濃伝では大した刀剣が残ってなさそうである。次男の伊豆守正房は竹屋源七郎に相州伝作刀を学んで兄の氏房と二人で薩摩新刀を創立した事で名匠と呼ばれる様になる。³⁵さて、この薩住刀鍛冶丸田系の関心深いのは次の疑問点である。一つ、薩摩藩主から美濃国関まで刀鍛冶の招きは如何なる道程を通ったかと言う事。所謂、人間的な流通の問題である。一つ、名高い刀鍛冶であるかどうかを別にして、天正年間後半より城下町を築き上げつつあった藩主はどんな情報を元にして招く刀鍛冶を選んだかと言う事。一つ、以上も述べられた文書の問題である。一つ、刀鍛冶に与えられた扶持の実態である。様々な問題を取り上げた事で読者の関心が少しだけでも湧いて来たかと思うところでこの項目への考察を終了させて頂く。

(六) 古文書学上の諸問題

関連する文書を探るのには工夫が思ったより必要である。様々な古文書学上の問題を以上にも取り上げた様に、ここでは史料編纂所に来てから更に直面した問題を記したい。最初は薩摩刀鍛冶屋の第一次史料の珍しさと関連している問題を取り上げたい。ある程度存在している事は

確実であるが、必要な史料を探し出す事が非常に困難な作業となっている。実例を取り上げて見れば、丸田系刀鍛冶に付いて史料編纂所オンライン目録で文書検索をすると「薩摩(国)」や「薩摩藩」や「島津(家)」や「島津(家) 文書」や「鹿兒島」や「美濃(国)」等の項目を「丸田(家)」や「備後守」や「氏房」や「正房」や「刀鍛冶」や「刀(剣)」や「刀工」や「鍛冶(屋)」等の項目と如何なる組み合わせで探しても無しと言う結果で終る。そしてある時、古文書学入門の授業中で、指導教官の指示であった「扶持」と言う歴史学的用語の検索を試みた時に、探している文書の種類が分かれば必要な文書は目録で見付けられるのではないかと、「ピン」と来た。しかし、大名が刀鍛冶を招いた場合は誰が誰にどんな文書を出したかと言う質問を先生方の何人かに聞いてみても、答えは誰も分からなかった。結局、自分の様々な研究調査によって、現在まで「知行宛行状」と「安堵状」と「坪付打渡状」の三つの相応しそうな文書類を見出すことが出来た。残念ながら、これでも上述した様な組み合わせ目録検索では必要な文書が出てこない。波平系刀鍛冶の文書も殆ど同じ状態である。唯一波平系に付いて見出したのは『波平刀工系譜』(K1087081)と言う文書である。刀鍛冶の両者の存在は、現代的日本刀剣研究に基づいて著作された書物から知っているけれど、その専門家の意見は必ずしも完全一致してないので、原文の調査等をする必要があると思つて来日した訳であるが、上述した問題が発生した為、私の工夫次第であると分かって来た。さて、現在に到るまで工夫しながら次の関連している様に見える、只今調査中の文書を見付けた。

その第一は、島津家文書の『鍛冶任受領先例勘文書』(島津家文書一七四—一八)の橋口(平)行安と言う当時の名高い薩住刀鍛冶の文書である。次は偶然に見付けた武藤助右衛門氏所蔵文書(3071.5323)の、織田信長が元亀二年七月に自筆した朱印付きの美濃国関刀鍛冶兼常宛て

の鍛冶職安堵状である。この文書に従って、信長の場合は、大名自筆の鍛冶に直接宛てる文書を下す慣習があった様に見えるが、島津家の場合は如何なる形を取ったのであろうか。とにかく、刀鍛冶宛の安堵状が存在しているし、知行宛行状も存在している事が演繹できよう。第三は、島津家文書の『刀剣鑑定書』（島津家文書―四八―一―八）である。本研究の対象とする時期の薩摩藩に付いての英語で製作された学術書は一冊しか存在していないので、日本語の学術書や史料の研究は来日してからの課題であった。そして、古文書とその学問は人生初体験であり、その知識を一から身に付ける事は楽勝だと言えない。因みに、私が様々な問題と取り組んで行きながら、読者の方々の中からアドバイスを頂ければ幸いと存じる。

（終わりに） 奥細道

この研究の日本学的意義を表明するのに取り上げられる注目すべき政治史や思想史や精神史等の分野を元にした社会文化的な特徴が、本論文の中である程度そして表面的に触れた様に、山ほどある。その解明開始点は何処に置いてもいいと言いたいのが、個人的な判断次第であるとも言えよう。「武芸文化」そのものは現代日本人の人間性に直接関連していて大幅な役割を果たしている概念であると言って間違いない。著者の博士論文が対象にする薩摩藩を考察に入れば、史上の様々な実例によって名高い現在まで伝承されて来た圧倒的な闘心は当時、現場の文化の中でも他藩と比較すれば四・五倍を占める約二割の武家人口や独特な外城制度や城の特性等に於いて明確に識別する事が出来よう。紹介した二つの「じげんりゅう」や「刀鍛冶系」はその社会文化的な確立した組織的な存在であり、特に前者の研究は薩摩隼人の精神面を解いてくれると考える。しかも、薩摩武芸文化を解説する為には更に手段が必要である。

その刺激的な発見は取り敢えず上述した様々な古文書と研究にあり、島津家の様々な人物が伝来した思想的な概念を紹介してくれる文書や薩摩琵琶歌等は武芸文化解説の補助となり得る。

こうした中で、現代日本社会の豊富な戦略的思考や感情的統制等、所謂驥の普遍性の根柢は、新渡戸稲造が『武士道』の中で日本の道徳観念を武士道に置いて理想的に考察しているが、更に日本人精神の深層にまで踏み込んで探求してみれば、人生に於けるあらゆる問題に挑戦する臨戦態勢の様な精神状態に置かれてると考えられる。言い換えれば、日本社会の本質は戦国時代の戦の実質に於いて展開し、徳川家の支配による平和の中で開花する事を許されて現在まで剣道と柔道の義務教育導入等によって伝承されて来た「武芸文化」にあると言って間違い無い。この最後の項目に於ける私の考察が日本学的な意義を齎せるかどうかは読者のご判断にお任せする。

西洋（要するに、欧米）の日本学学界は本研究主題の様なものを軽視していると既に上述したが、主流の研究でないことは言うまでもない。つまり、罨の多い研究であると考えられる事に従って、この項目の題目は最初は冗談としての発想であったが、実は振り返って見ると、そしてこの文章を書きながら奥の細道を歩み出した様な気もして来た。如何にも、自己表現力不足の為、満足する事の出来ない論文となったが、是にて末尾を結ばせて頂く。

【参考文献】

- 入江康平 『武道文化の探求』 不昧堂出版 二〇〇三年
- 小佐野淳 『図説・日本武芸文化概論』 風洋舎 一九九四年
- 神田千里 『戦国乱世を生きる力』 中央公論新社 二〇〇二年
- 菅野覚明 『よみがえる武士道』 PHP研究所 二〇〇三年

五味文彦 『殺生と信仰―武士を探る―』 角川選書 一九九七年
小和田哲男 『軍師・参謀』 中央公論社 一九九〇年

笹本正治 『戦国大名と職人』 吉川弘文館 一九八八年

常石英明 『日本刀の研究と鑑賞』(新刀編) 金園社 一九九五年

同 『日本刀の研究と鑑賞』(古刀編) 金園社 二〇〇〇年

調所一郎・調所謙一 『薩摩拵』 里文出版 二〇〇三年

世阿弥(著)、野上豊一郎・西尾実(校訂) 『風姿花伝』 岩波文庫 二〇〇三年

千田嘉博・小島道裕 『天下統一と城』 塙書房 二〇〇二年

千田嘉博 『戦国の城を歩く』 筑摩書房 二〇〇三年

洞富雄 『鉄砲―伝来とその影響―』 思文閣出版 二〇〇一年

奈良本辰也 『武士の道』 アートデイズ 二〇〇二年

福島金治 『戦国大名島津氏の領国形成』 吉川弘文館 一九八八年

藤木久志 『戦国社会史論』 東京大学出版会 一九七五年

同 『雑兵たちの戦場』 朝日新聞社 一九九七年

同 『飢餓と戦争の戦国を行く』 朝日選書 二〇〇一年

二本謙一・入江康平・加藤寛 『日本史小百科―武道』 東京堂出版 一九九八年

三木靖 『薩摩島津氏』 新人物往来社 一九七二年

同・向山勝貞 『薩摩と出水街道』 吉川弘文館 二〇〇三年

都城市制四十周年記念都城市史編さん委員会 『都城市史』 都城市 一九七〇年

村山輝志 『示現流兵法―史料と研究』 島津書房 一九九六年

柳生宗矩(著)、渡辺一郎(校注) 『兵法家伝書』 岩波文庫 二〇〇三年

山本博文 『幕藩制の成立と近世の国制』 校倉書房 一九九〇年

同 『島津義弘の賭け』 読売新聞社 一九九七年

同 『サムライの掟』 中公文庫 二〇〇一年

同 『切腹』 光文社新書 二〇〇三年

同 『武士と世間』 中公新書 二〇〇三年

黎明館企画特別展 『薩摩刀と島津家伝来の名刀』 斯文堂 一九八七年

渡邊一郎先生古稀記念論集刊行会編 『武道文化の研究』 第一書房 一九九五年

【注】

(1) 未だに、本研究が対象とする期間は相応しいと見える開始と終了の史的事件が未決定であるので、この大まかな期間にさせて頂いている。

(2) 分析される物事は本質を喪失すると言う微妙な危険性が存在しているので、分析そのものは細心の注意を要する。Paul Feyerabend(著), *Quest of Abundance: A Tale of Abstraction Versus the Richness of Being*, University of Chicago Press, 2001. 6 Introduction 参照。

(3) 何よりも後悔しているのはライデン大学日本学科の学生時代に漢文解読の自発的に選択できる授業が行われたが、当時の私は漢文とこんなに近付かなければならない時期が来ると想像も付かなかったので、出席しなかった事である。

(4) その実例としては東京大学史料編纂所所蔵の謄写本『関鍛冶七流略記』と『濃州 関鍛冶系図之書物』と『濃州 関鍛冶七流之系図』(二〇八四―五、二〇八四―六、二〇八四―七)と言う三つの史料が取り上げられる。

(5) 今年、鹿児島黎明館の三階で実施されている「薩摩の刀剣」と言う特殊展示会は大事な刀剣鍛冶屋が十系も領地内に存在していた事を明記している。その内に波平系や丸田系や行安系等があった。『薩摩刀と島津家伝来の名刀』(昭和六十二年波平系刀鍛冶千周年記念特殊展示会カタログ)参照。

(6) 西洋の日本武道に関連する文献は大体、実技を写真によって紹介する書物か、武道の噂話を取り上げる小説か、噂話を元に武道人物の生涯を解説するものか過ぎない。偶々、本格的な研究に基づいた学術的な著作が出る。実例を取り上げて見れば、Donn F. Draeger 氏の連続刊行した、そして一九九六年 Weatherhill 出版社から再発行された有名な『Classical Bujutsu(Martial Arts and Ways of Japan, V. 1)』、『Classical Budo (Martial Arts and Ways of Japan, V. 2)』、『Modern Bujutsu and Budo (Martial Arts and Ways of Japan, V. 3)』(三冊はともかく、G.

Cameron Hurst III (著) [Armed Martial Arts of Japan: Swordsmanship and Archery] Yale University Press, 1998 & Karl F. Friday (著) [Legacies of the Sword: The Kashima-Shiryu and Samurai Martial Culture] University of Hawaii Press, 1997 〇二冊 & Diane Skoss (編) [Koryu Bujutsu: Classical Warrior Traditions of Japan] Koryu Books, 1997 で開始された日本武道叢書と考えられる書物(現在まで三冊刊行)等が、近年米國(何故いつも米國であろう?)で刊行された或いは刊行されつつある僅かの著作である。

(7) 武家政権は明治維新に於いて感覺的近代化しただけで終戦まで存続していたのではなからうかと言う著者の異説が有効性を持つていとすれば、現代日本人の心の奥階層に於けるその影響は想像が付くであらう。

(8) ここでは小和田哲男氏が、私の視点を、少し違う情報収集と自力有効と言う社会的特徴への感覺からではあるが裏付けてくれる。「軍師・参謀」では「戦国時代と現代とは、時代状況がきわめて類似しているのではなか」と書いてある。この小和田氏の言う「持論」は本主題にも当て嵌められると私は考えている。小和田氏の著作の時は日本経済がまだバブル状態であったので、今の小和田氏がいが考えているかは当然ながら私に分らない事だが、恐らく変わって来たかも知れない。しかし、私の視点はまだまだ有効性があると社会心理学的精神階層の深さより演繹する事ができるのではなからうか。

(9) それぞれのウェブサイトは次の通りである。
ライデン大学 <http://www.let.leidenuniv.nl/cjck>
ビエナ大学 <http://www.univie.ac.at/geisteswissenschaften>
ロンドン大学 <http://www.soas.ac.uk/departments/departmentinfo.cfm?navid=404>
ハワイ大学 <http://www2.hawaii.edu/cjs>
ハーバード大学 <http://www.fas.harvard.edu/?ijs>
コロロンビア大学 <http://www.columbia.edu/cu/eaac>

(10) University of Pennsylvania の G. Cameron Hurst 博士は「Japan, Age of the Samurai」を題目にした授業を行う。Bowdoin College の

Thomas Conlan 博士は「Living in Japan's Sixteenth Century」を題目に授業を行う。それから、Karl F. Friday 博士が勤める University of Georgia は、博士はこれに関わりがあるかどうかは明確ではなからが、「War and Society to 1600」や「War and Society since 1500」等の授業があり、「Studies in Asian History」の中で「Japan and the Samurai」を項目がある。

(11) 平安時代に遡る大坪流馬術や小笠原流弓術や日置流弓術は総合武術ではないので、考慮に入れない。

(12) 総合武術でありながら伝承されつつある天心正伝香取神道流は、現在の存在として他に例を見ないし不思議な真実がある。その存在意義の把握は是からの課題にしたい。

(13) 武者修行に旅立った者には藩士もいたが、そうした場合は藩からもらった収入が喪失された為、実際に浪人となってしまった。

(14) 明治十五年に柔術の起倒流と天神真楊流によって創始された講道館柔道の開祖である嘉納治五郎の発想した「自他共栄」と言う概念も、その武道感覺を見事に發揮してくれた言葉である。

(15) 前者は渡邊一郎先生古稀記念論集刊行会「武道文化の研究」五四頁、後者は二木謙一他(編)「日本史小百科」武道「五七頁参照」。

(16) 刀剣専門家は意見が一致していない。Kokan Nagayama (著) Kenji Mishina (訳) 『The Connoisseur's Book of Japanese Swords』 Kodansha International, 1998 (残念ながら、この本は著者の手元にならぬので、頁番号を検査する事が出来ない) によると確かに文禄四年(慶長元年頃であったが、常石英明『日本刀の研究と鑑賞』(新刀編)二七八頁、によると天正十五年頃であった)。

(17) この源流の組み合わせは剣の道を優先している解釈の様である。柔道から見ればその源流は天文元年に開祖された「竹内流腰の廻り」と言う流儀であるとされているのに(渡邊一郎先生古稀記念論集刊行会「武道文化の研究」一七五頁参照)、現在、武道源流の解釈にはこの流儀名が出ない。

(18) 先日、史料編纂所の書庫で面白い発見をした。この丸目藏人佐に直接

関係すると見られる元亀三年三月十八日に出された「長惠一國一劍印可状」(台紙付写真七八二―一四二一)と言う貴重書に指定された文書である。その崩し字解説と翻訳と解釈は是からの課題である。

(19) 『西藩烈士千城録』(二〇四三―二九一―一五七) 参照。

(20) この日記は第二朝鮮侵略の虐待的实际を目撃した真宗僧の即時応答話の様なものである。当時の日本武芸の文化的解釈を戦場上の恐ろしい特徴や、戦いそのものとそれに付随する風習をみる為の史料としては唯一無二と考えてもよからう。

(21) 北島万次「壬辰倭乱研究における日本史料と朝鮮史料」前近代日本史料遺産プロジェクト研究集会報告集二〇〇一―二〇〇二(東京大学史料編纂所) 抜刷、三一四―三一五頁参照(著者が岡美穂子氏に頂いた史料である)。

(22) 『上井寛兼日記』(天正二年八月一日から天正十四年十月に到る)は一瞥して見れば「御太刀一腰・青銅百疋、進上申候、為御返札、太刀一腰・弓一帳被下候、(省略)」といきなりに始まって、そして例えば、天正十二年二月十八日の記述で「(省略)、從蒸安大徳丸へ刀被下候、佐藤玄蕃助作也、(省略)」等で所々こう言う話が見当たる。

(23) 当時のヨーロッパと同様に戦場戦略や築城法等は大きく変換して行く。城の石垣は次第に厚くなって行くし、堀の幅は鉄砲の射程距離を意識して広くなって行く等と言う戦略的対策が実行される。洞富雄「鉄砲―伝来とその影響」六八―六九頁、千田嘉博、小島道裕「天下統一と城」二八頁と千田嘉博「戦国の城を歩く」三五頁参照。

(24) 三木靖「薩摩島津氏」一五四―一五五頁と洞富雄「鉄砲―伝来とその影響」六七頁参照。

(25) 洞富雄「鉄砲」六四頁参照。

(26) この説はオランダ人の日本刀剣専門家との話で教えられた事だが、どうも、ただの噂話の様でありながら、常石英明「日本刀の研究と鑑賞」『新刀編』四頁は同じ説を取り上げる。

(27) 『西藩烈士千城録』(二〇四三―二九一―一五七)の記述によると、この流儀名は「体捨流剣術」と記されている。

(28) 『西藩烈士千城録』(二〇四三―二九一―一五七)、村山輝志「示現流兵法―史料と研究」八―九頁と調所一郎「薩摩拵」九〇頁参照。

(29) 東郷重位の場合、鹿児島・天門館の周辺にある千石の土地が与えられて、現在までその場で示現流の道場が存続されている。更に、東郷家の名は天保八年に製作されたと見られる「薩陽武鑑」の薩藩上級家臣記録に記載されていない。

(30) 薬丸家は島津家家臣になる以前、大崎城主であって肝付家の重臣を務めた。野太刀自顕流研修会編「野太刀自顕流(薬丸流)」野太刀自顕流研修会発行、一九八八年、二八頁参照。

(31) 野太刀自顕流研修会「野太刀自顕流(薬丸流)」二八―三一頁、調所一郎「薩摩拵」九二頁参照。

(32) 著者は平成十二年から平成十三年三月まで鹿屋体育大学に留学中、示現流の東郷重徳宗家と有村博康氏にその実技を体験させて頂いた。改めて感謝の意を表したい。

(33) 野太刀自顕流研修会編「野太刀自顕流(薬丸流)」野太刀自顕流研修会発行、一九八八年。恐らく、この研究は発行部数が少なかった為、品切れになっていて残念ながら古本屋でも見付ける事が出来ない。

(34) 常石英明「日本刀の研究と鑑賞」『古刀編』四六二―四六三頁参照。

(35) 常石英明「日本刀の研究と鑑賞」『新刀編』二七八―二七九頁参照。

(36) Kan'ichi Asakawa [The Documents of Iriki] Yale University Press, 1929